

昨年、選挙公約にユニバーサルデザインを掲げた潮谷義子氏が熊本県知事に当選した。以来、熊本県は職員研修、研究会での議論、インターネット博覧会への出展、国際会議の開催などを通じて、ユニバーサルデザインの普及啓発に力を注いでいる。新総合計画「パートナーシップ21くまもとも」、ユニバーサルデザインの視点でまとめられた。



しおたに よしこ ● 1939年生まれ。1962年、日本社会事業大学卒業。同年、佐賀県社会福祉主事。1964年、大分県社会福祉主事。1971年、社会福祉法人ねむの木学園ソーシャルワーカー兼保母。1972年、社会福祉法人慈愛園乳児ホーム勤務。1984年、同園園長。1999年、熊本県副知事に就任。2000年、熊本県知事に就任。主な著書に『こころの誕生』、『児童福祉を学ぶ』などがある

“人へのやさしさ”にあふれた精神文化を根付かせるためにユニバーサルデザインを県政の中心に置きました。

熊本県知事 **潮谷義子氏**

聞き手 梶本久夫(本誌編集発行人)



障害者専用トイレは心のバリアをつくる

県政の中心にユニバーサルデザインを置かれていますが、そのきっかけは何ですか。

潮谷 ユニバーサルデザインと出会ったのは、福祉の仕事をしていた頃です。バリアフリー仕様を施された建物や設備を見るたびに、これでいいのかなという思いが強まってきました。

もともとバリアフリーは、特定の誰かのために何かしてあげようということが発想の起点になっていますが、障害のある人だけのためのコンセプトで造られるような建物が本当の意味で障害者を大事にする視点に立ったものなのかという思いがありました。身近な例でいえばトイレをあげることができます。女性用トイレは混雑していることが多く、列をつくて並んでいることもめずらしくありません。障害者

用のトイレがあっても、人目を気にして誰も利用しない。障害のある人も心理的に利用しづらい。その点、ユニバーサルデザインの発想でいえば、お年寄りも、ベビーカーを押す親御さんも、重い荷物をもった人も、等しく利用できます。バリアフリーに対して抱いていたモヤモヤとした気持ちは、ユニバーサルデザインに出会ったことで払拭できました。

ユニバーサルデザインを推進しようという知事の強い意志は、選挙公約の1つとしてユニバーサルデザインを掲げられたことでもうかがえます。

潮谷 知事選の公約にはユニバーサルデザインを掲げましたが、県民はユニバーサルデザインという横文字になじんでいない。結局、選挙期間中は、ユニバーサルデザインにあまり触れないようにしました。幸いにして当選しましたので、公約の1つであるユニバーサルデザインを県政の中心に置いて、普及啓発に力を注いでいます。

県庁職員への普及啓発からはじめる

1月に開催された「ユニバーサルデザイン国際シンポジウム」は、今後、県が進めるユニバーサルデザインの普及啓発施策を展開するうえで、どのように位置づけることができますか。

潮谷 当選後はまず、職員への理解を深めるために庁内で職員対象の研修会を行い、外部のさまざまな方々からご意見を頂戴しました。その後、これは県民の方々にも参加いただきたいんですが、部局横断的な研究会を立ち上げて、それぞれの部局でユニバーサルデザ

インをどのように取り入れていくことができるのかなど、施策化に向けた議論を行いました。このような過程を通じて、庁内でもユニバーサルデザインが少しずつ理解されてきたところです。県庁職員の1人ひとりにユニバーサルデザインが染み込んでいけば、さまざまな施策にユニバーサルデザインを盛り込んでいくことが容易になります。

国際シンポジウムは、熊本県はユニバーサルデザイン



「1人ひとりの命に1つひとつ価値がある」が基本的な考え方をやりますという、県内外への意思表示です。ユニバーサルデザインをインターネット博覧会のテーマとしたのもそのような流れからです。

これまでの施策を通じて、ユニバーサルデザインの認知度はどれぐらい上がりましたが、

潮谷 県民アンケートによれば、ユニバーサルデザインの考え方や意味まで知っている人が14.1%、言葉を知っている人が35.4%、言葉を知らない人が45.6%です。



潮谷知事は児童福祉のスペシャリストでもある

ユニバーサルデザインの認知度は他県に比べて高い数字ですが、45.6%の人は聞いたこともない。この数字を見て、私はユニバーサルデザインのさらなる可能性を感じました。

ユニバーサルデザインの領域は限りなく広く、その領域を集約的にカバーできるのは行政しかありません。

パートナースhipが重要になってくる

ユニバーサルデザインを推進していくためには、市民と行政とのパートナースhipが求められますが、協働社会を実現するための具体的な手だてをお聞かせください。

潮谷 国や県にいろいろな施策があっても、住民にはなかなか届かない。パートナースhipとユニバーサルデザインは表裏一体で、どちらかが欠けてもうまくいきません。昨年6月にまとめた新しい総合計画の名称が「パートナースhip 21くまもと」であることから、パートナースhipに力を入れる県の姿勢がわかりいただけだと思います。

市民と行政の2極構造では、市民の要望なりを行政がやってくれるか、くれないかの話になります。センター的な役割をもった任意の団体を加えた3極構造にしたほうがうまくいくと思うのですが、その点はどうですか。

潮谷 コーディネーターとしての機関の存在は確かに重要ですね。その端緒として、企画開発部内にパートナースhip企画室を設けましたが、将来的には民間の方がここに来れば、いろいろな情報を得ることができ、援助も受けられる場になればと考えています。

デザインを推進することによって、そうなることを私は願っています。

一般的に生活の質と訳されるQOL (quality of life)を生命の輝きと訳された方がいますが、生きていることそれ自体に価値があるという知事のお話をうかがって同じように感じております。

潮谷 QOLは生活の質、人生の質、命の質です。それが3層にハーモナイズされなければ、QOLの向上にはつながらない。ユニバーサルデザインの推進は結果として、住民1人ひとりのQOLを高めることにもつながっていくでしょう。



熊本市内で走り始めたユニバーサルタクシー



集会ではできるだけ「ユニバーサルデザイン」に言及



慈愛園乳児ホームの園長時代、写真中央が潮谷知事



九州新幹線着工祝賀会では扇千景国交相と同席

ユニバーサルデザインの普及啓発を行っていくうえで重要なことは、その考え方や理念を理解している人1人ひとりが啓発者となつて、さまざまな場でユニバーサルデザインに言及していくことです。私自身、いろいろな集会に出席するとき、意識してユニバーサルデザインを口にするようにしています。

現在、県では住宅の10年政策を立案中ですが、その担当官が経過報告に来た時に、「業者の方々を対象としたユニバーサルデザインの研修会をやっていますか」と聞くと、答えは「やっていません」。県がユニバーサルデザインを推進しているというのに、これでは心もとない。県がリーダーシップを取らなければ、設計にユニバーサルデザインを反映させるのはむずかしいことを力説しました。

元気になる話もあります。民間のタクシー会社が5月から、ユニバーサルタクシーを運行しはじめました。ワゴン車を改良した車両で、車イスのまま乗り込むことができるし、自転車も積み込める。障害の有無に関係なく、さまざまな利用の仕方が考えられます。しかも料金は小型タクシーと同じです。

新幹線駅をユニバーサルデザインのモデル駅に

県総合計画の中で、ユニバーサルデザインはどのようにならされていますか。社会資本整備、産業振興、保健・福祉・医療、環境政策、男女共同参画社会の実現など、個々の施策の方向性についてお聞かせください。

潮谷 従来ある国の施策を利用しながら、それを一歩進めて、ユニバーサルデザインと連動させていきたい。

誰もが働きやすいまちづくり

2050年、総人口は1億50万人、生産年齢人口は5490万人、老年人口は3245万人になることが予測されます。現在のGDPを維持するために、労働人口の減少をどのように補えばよいのか、加齢や性差に関係なく、誰もが働きやすい社会をつくるために、人口減少時代の新ビジョンが求められています。

潮谷 私が以前働いていた福祉施設では、重度障害児とその親御さんの見学を受け入れていました。彼らの

ユニバーサルデザインの理念をしっかりと理解し、理解したことを政策展開に生かしていくように各部署にお願いをしているところですよ。

遅ればせながら、九州新幹線が着工し、新八代〜西鹿兒島間は3年後、博多〜西鹿兒島間の全線は12年後の開通が予定されています。先日、福岡県久留米市で起工式があり、国土交通相や鉄建公団総裁などがお見えになりました。私はその席で扇千景国交相に、「ユニバーサルデザインのモデル駅をつくってみませんか。改めて中身を整備しておうかがいます」と申し上げました。道路局長もユニバーサルデザインへの理解が深い方だと聞いております。財政が厳しい折ではありますが、国が率先して、ユニバーサルデザインに取り組んでいただきたい。

1人ひとりの命に価値がある

ユニバーサルデザインを推進した結果として、50年後の熊本はどのように変貌しているとお思いですか。

潮谷 「創造にあふれ、^{いのち}生命が脈うつくまもと」が総合計画のキャッチフレーズですが、この言葉とユニバーサルデザインは連動しています。

名声があるとか、学歴があるとか、財産があるとかに関係なく、老いても、病んでいても、男であれ女であれ、生きていることそれ自体に価値がある。1人ひとりの命に価値がある。ユニバーサルデザインはこの県の総合計画の基本目標であり、精神文化を育むベースであると考えています。

50年後の熊本のイメージは、人へのやさしさに満ちあふれた精神文化が根付いた地域社会。ユニバーサル

日常は自宅と病院あるいは自宅と養護学校との往復だけで、それ以外に広がりが無い。

親御さんに「1カ月に1回程度、お子さんにボランティアをさせてみませんか」と聞いたところ、最初は障害のある子どもにボランティアができるのかと戸惑っておりましたが、やることになりました。

言葉を発することができない子が、自分が豊んだオムツを赤ちゃんがしているのを見て、それを指さしてものすごく喜んでる。働くことで生きることの充実感をもてる。誰もが働きやすいまち、それはユニバーサルデザインのまちであるといえるでしょう。